い。けれど今夜は一緒にいるのが辛かった。出来れば離れてほしいけどそう言えばまた怪しまれてしまう。
「おやすみ」
ナオヤに背を向けるように寝返りをうつ。そのまま目を閉じて、意識がなくなるまでずっと動かずにいた。途中で部屋の灯りが消されて、また手のひらがオレの髪を撫でていった。おもいきり反応してしまいそうなのを堪えて気づかないふりを続ける。
「何かあるなら早めに言え。いいな」
案ずるとも叱るとも聞こえる声でそう言ってナオヤはオレの隣で眠りについた。
オレはそれからしばらく眠れないまま、この人といつまで一緒にいられるかを考えていた。
考えて考えて……その夜からオレはナオヤが怖くなってしまった。

大好きだった体温が怖い。重ねた身体の熱さや手首を握りしめた時に伝わってくる鼓動。今までなら安心していられたナオヤが生きている証が恐ろしくてならなかった。
生きているという事はいつか必ず死ぬという事だ。生きて、死んで土に還り肉体は誰かの糧に、魂はどこかへ流れていく。簡単には死なない生き物になってしまったオレはそのサイクルから切り離された。
オレは魔王だが、完全に肉体を離れた魂を呼び戻す能力は持っていない。それはどちらかといえば天使や神の領分なのだろうが、ヤツらになら出来るのかどうかも知らない。完璧な蘇生の魔法は存在しないのだと聞いた事がある。どんなに強大な魔力を持っていてもナオヤが死んでしまえばオレに生き返らせる術は無い。
自分の反応が極端だと自覚はしていた。人は必ず死ぬのだし、死なれるのが怖いから触れられないなんて言われてもナオヤも理解出来ないだろう。だからそうは言わずに出来るだけ理由をつけて同じ部屋で寝る事を避け、互いの身体に手を伸ばすような雰囲気を避けた。魔王軍の生活はわりと忙しくてオレ達も始終ベタベタしていたわけではないから最初のうちは何も言われはしなかった。けれどずっと一緒にいる相手に、胸にわだかまる思いをいつまでも隠しおおせるものではない。
「気に入らない事があるならはっきり言え」
夜中にやってきたナオヤにそう言われた。静かな口調だっ

たけれど腹を立てているのが見てとれた。
「別に何も無いよ。ナオヤこそいきなりどうしたんだ」
取り繕おうと吐いた言葉はナオヤを更に苛立たせるだけだと知っていた。でもオレには何でもないふりをするしか出来なかった。
「俺を拒む理由は無いんだな？」
伸びてきた腕に背を向ける。ナオヤを直接見ていなければ……一年前と、十年前とどう変わったかを、目の前の肉体に流れている時間について考えずに済めば、少しは冷静でいられた。身体に回された腕がオレを捕らえて、耳の裏に唇が落とされる。
「……強引なのは好きじゃないんだけど」
「嘘をつくな」
今の言葉への返事か、それともここ暫くのオレの態度へか。逆らえないような方向へ誘導してくるナオヤにいつも流されていた自覚はあった。
「俺を避けているだろう？」
「何の……っあ…待…てっ、て……」
耳をゆっくり噛み、回した手を衣服の隙間から差しこんでくる。電流のように走る怖気と働かない頭の向こうに慣れた快楽が潜んでいた。逆らえなくなる所までナオヤが手を伸ばすより先にオレはナオヤの手を引き剥がし身を捩って逃れる。
「待てってば！」
勢いで座りこみ荒い呼吸を繰り返す。
ナオヤの手が一瞬肩に触れた。けれどオレがあからさまに身体を震わせたのを認めてすぐに離れていく。
「どういう理由で俺を避けるのか知らないが、何かあるなら言わなければ解らない。……だが俺は別にお前に無理を強いるつもりも無い」
前半は呆れた口調で、後半は少し気遣いの窺える様子で言って部屋を出ていこうとしている。
「あ……」
座ったまま振り返るとちょうどナオヤが部屋のドアを閉める所だった。僅かにこちらに視線を残したままゆっくりとドアが閉まるまでの間、行かないでくれと叫びそうなのを必死に我慢していた。
「どうしよう……」
それまでとは違う不安に襲われてまた震えが上ってきた。
オレの態度はどう見てもおかしかったはずだ。さっきナオヤは自分が何かしたのではと疑っていたようだけど、次はオレの気持ちを疑うだろう……今みたいな態度じゃナオヤを嫌いで避けているようにしか思えないよな。そんなふうに誤解されたらどうすればいいんだろう。